smile

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｍｉｌｅ

【Ｎコード】
Ｎ８７１７Ｙ

【作者名】
刃下

【あらすじ】
絵本作りに奮闘する弟と姉の話

説明と一話目（前書き）

完全にフィクションです。実在しているものとは関係ありません。

説明と一話目

教科書、手紙、離婚届、その他多くの紙媒体が電子媒体へと移行し始めたのは、まだまだごく最近のこと。
某国のお偉い人が頭をひねりにひねって打ち出した資源保全の政策。その名を「ＡＤＭＰ（ａｌｌ　ｄｉｇｉｔａｌ　ｍｅｄｉａ　ｐｌａｎ）」。
アルファベット４文字にして少しかっこよく見せようとしているのがバレバレだけど、要するに木なんて切らずに、デジタルデータで何でもかんでも保存しちゃおうってなところだ。
某国で１０年前採択され可決。その２年後に施行されている。
わが国でも追従するような格好で、近年採用が決まった。本屋や郵便局などの反対もむなしく、今や多くのユーザーが日常生活でこれを使用している。
とはいっても、商店街を歩けばいかにも年季の入った本屋だってまだあるし、一部では「知ったこっちゃねえ。私は紙を使うんだ」って人もいたりする。当然といえば当然の事だ。

絵本。
これもまた当然の如く、時代の呻りを受け電子媒体への移行をはじめている。
なんとかｐａｄやなんとかｐｈｏｎｅで世界中の絵本を見ることができるようになった。
もちろんのこと日本語に翻訳されていて、値段も紙媒体のときの半分以下の値段で読むことが出来る。
このようにｋ・・・むがっ。・・・ふぅ。あー、そこの君、そう君だ。
君にはお気に入りの絵本があったか？今でも内容を覚えている絵本があるんじゃないか？

そのお話をだ。四角い箱だかなんだか分からないものを通して見るのは味気ないと思わないか？
紙本来の手触り、ページをめくる時のわくわくが感じられないと思うだろ？
どうだ、寂しいだろ。寂しいと思った君は今すぐにＹＵカンパニーが出版していｒ・・・もがっ。
ちょっと、姉さん勝手なことしないでよ！・・・という訳でこんなご時世だろうと紙媒体で絵本を作り続けている僕らＹＵカンパニー。
これはその絵本作りの記録である。

◇

「大和ー、まだ着かないのかよー」
先ほどまで後部座席でぐーすかと気持ち良さそうな寝息をたてていた女がいつの間にか目を覚ましていた。
顔にはタオルをのせ、両足を助手席の頭の部分にのせている。
靴下は脱ぎかけで、服もしわくちゃ、へそ丸出し。これを女性と表記していいものか迷うな。
「まだだよ、うめ姉さん」
「まーだーつーかーなーいーのーかー、こーらーんーやーまーとー」
「もう少しだってば、湖蘭梅姉さん」
「おい、次フルネームで呼んでみろ。足の指を４本にしてやるからな」
僕がバックミラーに目をやるより早く、姉さんは起き上がり耳元でドスの聞いた声をだした。
「はい・・・ごめんなさい・・・」
姉さんはフルネームで呼ばれることを何より嫌っている。
小学生の頃、男の子グループにご飯ウメーと呼ばれていじめられていたらしい。
湖蘭　梅　↓　こらん　うめ　↓　ご飯　ウメー

・・・すごいセンスだ。
始めて聞いたときは、小学生のネーミングセンスよりうめ姉さんがいじめられてたってところに驚いたけど。

「この車がポンコツだから遅いんだろ？はっはっはっ」
そういって姉さんは持ってきたポテトチップスの袋を豪快にあけ、ぼりぼりとむさぼり始める。
カスが落ちてる・・・ああ、そんな手で窓を触らないで・・・。
こっちの思いとは裏腹に姉さんはまるで自分の部屋かのように僕の愛車を汚しはじめる。
僕は常々思っていた。
この車と僕は生まれる前からの運命で繋がっていて、それを姉さんといえども汚すことは絶対に許されないと！
・・・いや、中古車だけどさ。
免許をとって、これが生まれてはじめての大きな買い物だったんだ。
それが姉さんの『弟の物は私の物』というジャイアニズムによって汚されていく・・・。
悔しい・・・けど・・・すっげー悔しい。
ちなみにこの車の前後には若葉マークが燦然と光り輝いている。

「山道の運転難しいんだから、姉さん少しは静かにしててよ」
「山はいいけど、キャストの手配はちゃんとできてんだろうな？」
ははっ、会話が繋がってないだろ？姉さんは僕の発言なんて最初の一文字しか聞いてないんだぜ。
もう慣れたさ。
「うん、ちゃんと現地集合呼んだよ。それに木の刈れる山と桃の流せる川のある場所には今向かってる。万事大丈夫さ。」
それでわざわざこんな糞遠い場所まで運転することになってしまった。
「それならいいけどな・・・、もし何かミスがあれば・・・」

「・・・あれば・・・？」
「お前の体で支払ってもらうからな。」
姉さんは後部座席から身を乗り出すと、僕のほっぺたを舐めながら言った。

説明と一話目（後書き）

感想をお願いします

二話目（前書き）

全部フィクションです。全部関係ありません。

二話目

「姉さん、もう着くよ」
ポテトチップスの袋に片手を突っ込んだまま、文字通り食い倒れた状態で二度寝している姉さんをバックミラー越しに起こす。
姉さんは一瞬だけ薄目を開けた後、すごくめんどくさそーな顔をした。
んんーっと怒鳴るような声を漏らし、寝返りを打ちながら持っていたポテトチップスの袋を座席の下にぶちまけた。
「なんてことするんだよ、そこは掃除するのが大変な場所なんだぞ！」
「うるへーなー、声がでかいんだよ。手が滑っただけじゃんか。」
「嘘つけ、わざとだろ。姉さんはいつもそうだ。自分で掃除したことがないからそんなことができるんだ。だいたい自分の部屋だって僕が呼び出されて」
「はいはい、うるさいうるさい。わざとやったよ、悪かった。これでいいか？」
姉さんはぶうっとほっぺたをむくらませた。
バックミラーに映る大人に怒られてしゅんとしてしまったときの子供のようないじけた顔。
こういうところは純粋に可愛いのになあと思う。
なんていうか人によっては守ってあげたい衝動にかられたりするのだろう。
故に我が姉ながら非常に残念である。
なぜ残念なのかといえば、姉さんの場合精神年齢とわがままのレベルまでもが子供だということだ。
一言でいえば姉さんは内面が糞ガキ以下だ。
知っているだろうか。

歯磨き粉が携帯食になるということを。
これは噂でも都市伝説でもサバイバルの知恵でもない。
それはある日の出来事だった。
「うわあ・・・まじかよ・・・」
「はっはっはっ、面白いなこいつ」
弟が買ってきたせんべいを姉が一人で食べ、弟がついだ二つの湯のみのお茶を姉が一人で飲む。
どこにでもある一家団欒の風景だ。
テレビでは男のお笑い芸人が女性タレントの口紅を食べるという芸を披露している。
「あんなものよく食べるなあ、この後絶対お腹壊してると思うよ。いくらお腹が減っても真似しちゃ駄目だよ姉さん」
「むっ・・・でもこれはこれですごいじゃないか。こいつは遭難しても口紅があれば生きていけるんだぞ。他のやつは食べるものがなくて一人、また一人死んでいく中、こいつは口紅を食べて生き残れるんだ。私は尊敬するなー」
「こんな人を尊敬しちゃ駄目だよ姉さん・・・」
そもそも食料を持たずに口紅を持って遭難することなんてあるのだろうか。
すると姉さんは手に持っていたせんべいを一枚ぼりっと噛み砕くと、少し考えて呟いた。
「口紅がいけるなら・・・歯磨き粉だって食べれそうだよな」
「ど、ど、ど、どうかなあ」
そのとき僕はすでに気がついていた。
ああ、僕は歯磨き粉を食べなきゃいけないんだ。
「見たいなー、歯磨き粉を食べてるところ」
見たいなーとはつまりやれということである。
姉さんは立ち上がり洗面所にあった開けたばかりの歯磨き粉を手に戻ってきた。
「ささっ、ぐぐっといっきにどうぞ」

「全部！？」
姉さんがどうぞどうぞとジェスチャーで勧めてくる。
「遭難してお腹が減ってるんだぞ。たくさん食べなきゃ死んじゃうぞ？」
「でもほら、遭難してるなら節約しないとすぐなくなっちゃ」
「いいから飲め」
その日は下痢が止まらなかった。

「おい、前見ろ、前」
姉さんの叫び声ではっと我に返る。
いつの間にか目の前にカーブが。悲しい記憶を思い出しているうちにトリップしていたようだ。
慌ててハンドルをきる。
「勘弁しろよなー」
大きくため息をついて姉さんは座席の背もたれに倒れこんだ。
「ご、ごめん」
ここは山の中。カーブを曲がり損ねれば崖下にまっさかさまだ。
姉さんが叫ばなければ、本当に遭難するところだった。危ない危ない。
「しょうがないなあ、まったく。じゃあ姉さんはまた寝るから」
そう言って姉さんはおもむろに座席をかたむける。
まだ寝る気か。寝る子よ、これ以上育ってもらうと困るんだが。
主に食費とか食費とか食費とか。
「ちょっと姉さん、もう着くってば」
「んー、あー、・・・ぐぅ」
この野郎。
「ちょっと起きてよ姉さん」
「ううーあー、ううー、梅ちゃんクイーズ！パンはパンでも食べられないパンってなーんだ」
読んでる人はいきなりのことで驚いただろう。

これは姉さんが編み出した、一分一秒でも長く寝ていられるという技である。
相手（主に起こしにいく僕）にクイズを出して僕が答えるまで、寝ていられる時間を稼ごうというものである。
ちなみに出題パターンは3パターンしかないが、答えは無限大にある。
本人いわく頭が寝てるからクイズはとっさにでてくるだけらしい。
「フライパン」
「ぶっぶー」
「パンダ」
「はずれー」
「パンツ」
「ちーがーうー」
「着いたよ」
サイドブレーキをかけて、エンジンを切った。
運転席から降りると、後部座席に回って姉さんを揺り起こす。
「で、結局正解はなんだったの？」
「正解はなし。食べられないパンなんてこの世には存在しない。つまり沈黙が正解。」
「沈黙してたらいつまでたっても起きないだろ馬鹿」
僕は寝ぼけた姉さんを引きずりながら山の中にぽつんと建つ古ぼけた民家へと向かった。

三話目（前書き）

全部フィクションです　全部関係ありません

三話目

舗装のされていないでこぼこ道を車で登ること二時間弱、森の少し開けた場所にぽつんと一軒家が建っていた。
渡されていた鍵で錠を開け、少し重たい引き戸を通って家の中に入る。
中は光が差し込まず、薄暗かった。
僕は窓のところのついたてをはずし、部屋に日光を入れる。
もう建てられて何年の月日が経つのだろうか。
土壁は所々はがれかけていて、いかにも昔の木造の家といった感じ。
建っていたというよりは忘れ去られていたという表現が似合いそうな、そんな雰囲気だ。
文化財にでも指定されていそうな外見だが、一年前までは人が住んでいたらしい。
前に住んでいた老夫婦は、二人とも老人ホームに転居することになり、老夫婦の息子が取り壊すのはもったいないと、管理しながらこうしてドラマの撮影会社や、僕らみたいな物好きに安く貸し出している。
「うひゃー、今にも崩れそうだな。これは地震に耐えられないだろう」
そういった情緒が全く理解できない姉さんは早速土壁のはがれかけた場所をほじくり、シロアリの如く古民家の破壊をはじめていた。
「姉さん、崩れたらしゃれになんないからあんまり触っちゃ駄目だよ。」
働かない姉を他所に、僕は車から荷物やら小道具やらを運び出す作業にかかることにした。
作業をはじめて３０分ほど。
ドラマの撮影なんかで何度も使用されていたからだろうか。

部屋は少しホコリが積もっている程度で、十分に綺麗な状態だった。
「おーい、やまとー。ポテトチップスの袋捨てたいんだけど、ゴミ箱ないのかー？まあいいや、そこらへんに捨てとこっと」
ちょうどまさに今、我が姉に汚される前まではゴミ一つ落ちていなかった。
「姉さん、ゴミはゴミ袋にいれてよ。持って帰るから」
「え、何で持って帰るんだよ。捨てて帰ればいいじゃん」
そう言って姉さんは壁の崩れた場所にポテトチップスの空き袋を詰めはじめた。
僕はいけないと思いつつもその光景をぼーっと眺めながら、どうか姉さんの馬鹿力で壁が崩れませんようにと祈るだけだった。
姉さんに昔、ブロックの塀と塀の間に無理やり詰め込まれて抜けなくなったあげくレスキューを呼んだときのトラウマが襲ってくるも、それを間一髪のところで拭い去る。
（しょうがないから、後で僕が取り出して捨てておこう。）

「おじゃま、しますよ」
玄関の引き戸がゆっくりと開いた。
「えっと、来音さんですよね？今日からよろしくお願いします」
僕は戸の向こうに立っていた老人二人に頭を下げる。
「こちらこそ、おねがい、いたします」
おばあさんはそう言って深々と頭を下げ、おじいさんもつられて頭を下げた。
「じいちゃんばあちゃん、今日はよろしくな」
大手を振り上げて姉さんが挨拶をしたところで、またも戸の向こうに来訪者が現れた。
「自分、岩雄です！今日はよろしくおねぁぃしゃす！」
この静かな土地とはミスマッチなほど声の大きい青年が帽子を脱いでお辞儀をした。
見たところ僕と年齢は同じくらい、だが身長は僕なんかより随分と

大きい。
（岩雄くんか・・・主人公役の人かな？あれ、でもそんな名前だったかな？）
「あの、お兄さんのお名前教えてもらってもいいですか！」
岩雄くんは体が大きく、ただでさえ声が大きいため、僕は一瞬ぎょっとしてしまった。
「僕ね、僕は湖蘭大和。後でもう一度しっかり紹介するけど、今は名前だけ。あっちは梅さんで、こちらが来音さん夫妻」
「みなさん、今日はよろしくおなしゃす！」
とても元気のいい青年だ。スポーツマンって感じで爽やか。
こちらまで元気になってくる。
しかしなぜか姉さんの顔が曇っていた。
「おい、猿。こっちこい」
うお、なんて直球な。
岩雄くんは何事もなかったように、はいと気持ちのいい返事をして嬉しそうに姉さんに近づいていく。
岩雄くんの顔はこう言ってはなんだが、主人公の顔って感じとは違う気がする。
なんていうか、そう。姉さんの言葉を借りれば顔が猿っぽいのだ。
いや、もう・・・これは猿だ。
これぱっかりは派遣した会社の選択なので、来てしまった今どうこう言ってもしょうがないのだが、履歴書の顔とあまりに違いすぎてだいぶ行く先が不安になってくる。
「・・・・」
姉さんは猿に、いや岩雄くんに耳打ちする。
猿くん、いや岩雄もその後、姉さんに耳打ちした。
「あー・・あっはっは。分かった分かった。そういうことなら大丈夫だ。あっはっはっは」
姉さんは何かに納得すると大笑いしながら部屋の外に出て行った。
いったい何だったんだろう。

そうこうしている間に、時計の針はもうすぐ正午を刺そうとしていた。
日が暮れないうちに撮れるところまで撮りたいので、とりあえず来音さん夫妻と打ち合わせをはじめることにした。
二人とある程度話したところで、姉さんが大きな袋を抱えて戻ってきた。
袋から宝物を取り出すかのようにおおげさにカメラを取り出す。
「それでは諸君、撮影に入ろうじゃないか！」
姉さんの眼はキラキラと輝いていた。

◇

三話目にしてとうとう説明する時がきた。
ここに至るまで三話もかかるとは思わなかった。
お前らさっさと絵本作れよと思われたかもしれない。
それはまあいいや。
聞いて欲しいことは一つ。
僕ら兄弟はそろって絵が下手なのだ。
不器用ずぼらな姉さんはもちろん、僕だって人に見せられるほどの絵は描けない。
ならどうするか？
姉さんの頭脳が考えに考えて出した答えがこれだ。
実写でいいじゃん？
逆転の発想でも何でもない。これが僕らに出来る最良の選択。
だから絵本なのに絵は一切使われていない。
姉さんは革新的だと思っているらしいが、説明のところで紙本来の手触りだとか、ページをめくる時のわくわくだとか御託を並べていた人と同一人物の考えだからねこれ。

・・・まあ、僕は姉さんがそう言うなら従うだけなんだけどさ。

といったところで三話目終了。四話目に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8717y/

smile

2011年11月28日05時53分発行